

---

# 私（僕）と性転換と召喚獣

まり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私（僕）と性転換と召喚獣

### 【Nコード】

N2614BA

### 【作者名】

まり

### 【あらすじ】

朝起きたら違和感が…… その正体はなんと胸にタワワが！ 明「僕が女!？」 いきなりのできごとに何をどうすればいいかわからない 悪明「とりあえず学校いけよ」 性転換した明久の新しい性活はどうなる!？

朝の惨劇（前書き）

Dクラス戦後の話です

## 朝の惨劇

「ふああ おはよう……」

朝の日差しが僕の顔に当たっていたので、すぐに起きることができた。でも正直言うとまだ眠い。それでもベットからはいでて重い体を引きずりながら洗面台へ向かう。

しかし、ここである疑問が生じた。胸が床に擦れて痛い。おかしいなあ、上半身は起こして歩伏前進してるから擦れるわけがないのに違和感を感じながらも洗面台にたどり着き鏡の前で寝癖を直す。ここでさらに疑問が生じた。髪が異様にのびてないか？しかも艶がある。鏡で見てもまるで女の子になったようにしか見えない。これは一体……

「……まあ深いことは考えずに朝食をとろう。今日は贅沢に砂糖もつけようかな」

朝食をとり終わってまた鏡を見る。これだけ長い髪にはなったことないからなあ。後ろで束ねてポニーテールにしてみよう。僕の好きな髪型だしね。そして髪を束ねること数分。

「できた。意外と似合ってるかも」

ハンサムな顔はどんな髪型でも似合ってる前にテレビでやってたよ。うな。つまり僕はハンサムってことか。

「あっお弁当作るの忘れてた」

今日はお弁当無しは正直キツイ 昨日出た新作のゲームを買ったから今懐が寒い 購買でパンも買えないだろう そうなったら良くて昼食抜き、悪くてあの世いき また姫路さんの料理の実験台にならなきゃいけないかも そうなったら確実に死ぬ 気持ちは嬉しいんだけどなあ、何で科学薬品を入れるのかな？

「ついでに今日のお弁当はアスパラのベーコン巻きに出汁をちゃんとした卵焼き、冷凍の春雨のラインナップ」

ぬう自分でも美味しそうに感じる 和洋中が揃ったお弁当ができた 時間には余裕があるけど今日は早めに学校にいこうかな

そう思っただけ自分の部屋へいき着替え始める そして制服に着替えるときに僕の胸に大きな実りがあるのが見えた あれ？昨日の夜にはなかったよね？

興味本意で握ってみる

「あつ ひゃうう」

えっ？ 今の僕の声？ すごく高くて色っぽかったけど！？ 気のせいだよな？ さらに今度は揉んでみた

「あつ ああん んっ んん！」

あきらかに僕が声を発していた

ちょっと待てい！ 何で僕の声なんだ！ 僕はこんな『禁止事項』が胸を【放送禁止】な声は出さないぞ！ よしっ冷静になるんだ冷静に 今僕が疑問に思ってることを整理してみよう

- ・歩伏前進をしたら胸が痛い
- ・髪が異様にのびている
- ・胸に実りがある
- ・声が高い

.....

わからない.....

どうしよう.....

「自分の胸を確認したらどうだ？」

今のは悪魔か？ 普通は悪魔の言うことは聞かないもんだが、それしか方法はない むしろ名案だ  
意を決したら即行動！ シャツを脱いで胸をみる  
そこには姫路さんほどではないものの、しっかりとしたタワワができていた

「現実には厳しいものだな.....」

悪魔の声でハツとする 現実だと？ なにをいうか、これは幻覚だ  
僕にタワワなどない

「なら目を擦ってもう一度みたらどうだ？」

おもしろい それでもしまだタワワがあったら認めようじゃないか  
僕は目を何度か何度も擦りバツと胸をみる そこにはやはりさつきと変わらぬタワワがあった  
えーと、つまりこれは.....？

「女になつたか…… あわれ」

「嫌だああああああああああああ！」

女になつちやつたよ 駄目だ、もうお婿にいけない……

いやつまだだ これは一種のホルモンバランスが崩れたただけだ 女性ホルモンが多くでただけなんだ なるほどそうだったのか！

「明久にしては賢い考えだな なら下の方を見て見るよ」

一言余計だ！ ん？ 下？ ……なるほど、あれがついているかついてないかで確認しろと？ バカめ！ 僕は男なんだ！ もちろんあるに決まつてる そうなればホルモン説に決まりだ 見よ！ ちゃんとしてー

バツ

ーーついて……ない

ここまできたら認めようじゃないか 僕は女になつたと……

「テテテテツテテツテッテー

明久は性転換した」

テメエ悪魔！ ドラクエのレベルアップのBGMであたかもいいことのように言っんじゃないやねえ！

「あっもう時間だ」

何っ！ バカな！ もう登校時間だと！ しかたがない この件は  
学校で考えるか とりあえず男性物の制服は胸がキツイから姉さん  
の昔使ってたセーラー服を着よう 着替えたらお弁当をもってダッ  
シユだ

性轉換した僕の新しい性活が始まった



朝の惨劇（後書き）

三作目

二作目もまだ上手くいってないのに……

雄くんヒドイ(前書き)

学校到着

明久甘い声出しすぎ

## 雄くんヒドイ

「きやつ」

また転けちゃった これは何回目？ うーん、まだ女の子の体に慣れてないのかな？ 体が敏感に反応するし、だんだん声も女の子っぽくなってきた さっき自分の胸を触ったときもあれだったし、これから色々大変かも  
でも今は早く学校に行かなくちゃ……

「痛あ また転けちゃったよ」

これじゃあ走るより歩いた方が速いかも 完全に鉄人に怒られるなあ  
あ あの顔を見たら……考えただけで寒気がする

「吉井遅刻だ……ぞ？」

「すいません ちょっと道で転けちゃって」

「家に帰れ」

「何で!？」

生徒が登校してきたのに帰れっていくら遅刻したからってヒドくない？

「なぜセーラー服なんだ？ 胸に詰めものまでして、モテないからって男に手を出す気か？」

「断じて違います 胸がキツくて入らないから違つのにしたのに……」

「こんな詰めものが入ることがそんなに大事なのか？」

ムニユ

「あんっ 触らないで」

「……………」

ムニユムニユ

「ひゃうん！ んん」

「……………」

ムニユムニユムニユ

「あっ やめっ てえ」

「……………まさか？」

や、やっと気づいてくれた 敏感な今、触られるとどうしても甘い声が出てしまう あのまま揉まれていたらヤバかったかもしれない

「そうですね なぜか女の体になっちゃったんです」

「すまなかつた（土下座）」

「ええっ！？ どぞどぞうしたんですか！？」

「たとえどんな場合でも女子の胸を触ってしまった れっきとした犯罪だ すまん！」

鉄人…… 貴方の義理堅さ尊敬します 生徒に土下座ってなかなかできませんよ

「先生は悪くありませんよ 今後気をつけてください」

「……………いいのか？」

「んー この遅刻は体に慣れてなくて転けてたからって納得してくれたらまあ許します」

「わかった ワケ有りなら仕方ない で吉井、これからどうするんだ？」

「なるべくバレないようにしますが、いつかは……」

雄二辺りにはすぐにバレるかな 仮にも元神童なワケだし

「そうか 全面協力しよう」

「ありがとうございます それじゃあ僕……私はいきますね」

「頑張れよ」

鉄人の心強い後押しができたし、これでFクラスさえ乗り切れれば完璧だ よーし、やってやりましょうか！

Fクラス

相変わらず汚い教室だなあ 埃っぽいしカビくさい 私ここにいられるかなあ まあテストの点が悪かったのが原因だけど…… とりあえず中に入ろう

「ゴメン 遅れちゃっ(ぼふ)きゃあ」

なにこれ？ 黒板消し？ 誰よ、こんなイタヅラするのってあれ？ 段々思考まで女っぽくなってきちゃった

「明久お前今日は点を補充するって言ったろ 遅れてきた罰だ」

「ひ……ひどいよお うえーん」

あれ？ 泣きたくないのに涙が……

「おいおい 泣くこたないだろ？ っってお前明久か？ なんだか随分女っぽく見えるが」

「なによ、悪い！」

「声も高いし髪も長い 一体どうしたんだ？」

そっそれは言えない 雄二に女になったって知られたら笑いものにされちゃう 絶対知られたくない

「えーと、イメチエン？」

『アキちゃんキターーーー！！』

「（びくっ）こっ怖い」

「セーラー服は前にもあつたからいいとして胸に詰めものは………随分凝ったイメチエンだな」

ムニ

「ひゃん」

「……………」

ムニムニ

「あう やああ」

「……………」

ムニムニムニムニ

「あつだめえ それいつじょうは んんんー！」

「………」

ムニムニムニムニムニムニムニムニムニムニムニムニムニムニ

「も……だめえ」

「………おい、まさかー」

やっぱ 感じてたら気づかれちゃった せめて皆にはバレないようにしないと

「ーお前女「お願い！ それ以上言わないで！」 なんだだ

「頼むよ 何でも言うこと聞くから」

「……とりあえず成り行きを聞こう」

「あとでいいかな？ 今はそのー 皆いるし」

「じゃあ飯の時だ わかったな？」

「うん わかった」

「ならいい」

と、とりあえず助かったとみていいのかな？ 雄二にはバレちゃったけど…… 黙っててくれてるわけだし、後は展開次第だ

「おい明久ほしひさ」

「なに雄二ほしじゅ」

『今のお前は女なんだろ？ ならさっきの言うことの一つとして俺のことを“雄くん”と呼べ』

『はっ？ なに言ってるの？』

『どうも別人と話してる感じでやりにくい いっそ別の誰かとして呼んでもらった方がいい』

『でも………なんか嫌だなあ』

『女だってバラすぞ』

『うつ はあ……雄くんヒドイよ』

「それでいい つかヒドイは余計だ」

「痛っ もーこの体色々と敏感なんだから気をつけてよ」

「色々って……なんでもねえ」

そういつて雄二は教科書を呼んでたけど、何か顔赤くない？ さっき色々のあたりで戸惑ってるように見えたけどどうしたのかな？

それにいつになったらこの体元に戻るの？ ああーもう！ これからどうなっちゃうのー？

はあっ まっその時は一応友達の雄二が助けてくれるよね？

「頼りにしてるよ 雄くん」

「んっ？ なんか言ったか？」

「なーんでもないっ」



雄くんヒドイ(後書き)

まさかの雄ニフラグ？ なんてことはないよね 多分……

私は明菜（あきな）（前書き）

普通だ

どーぞー

私は明菜（あきな）

「あー つかれた」

机につつぷす ただでさえテストは疲れるのに四時間連続で受けるのはキツイよ まあ今からお昼だし、ゆっくりお弁当でも食べよう今日は気合い入れて作ったから楽しみだなー

「（がしっ）さて明久 カミングアウトの時間だぜ？」

「……………はい」

ううう 折角のお昼があ 雄二と一緒にだと疲れるんだよ おかず交換持ちかけてくるし 今日はやだなー

「よしっ じゃあ屋上いくぞ 秀吉、ムッツリーニ、姫路に島田も来い」

「えっ！ ちよつと雄二「あつ？」 …… 雄くん、話が違つよ」

「友達にくらいは話せ アイツらにはどうせ隠しきれん」

「わかつたよー だから猫つかみ止めて」

女の体になつたら体重まで軽くなつたみたい つくづく思い知らされるよ

ところかわって屋上

ここにはいつものメンバーが揃ってる 雄二に秀吉、ムッツリーニ、姫路さんに美波

「さあ明久、話せ」

「…………… 雄くんが話してくれない？」

「こついつのは本人が話した方がわかってもらえるだろ」

それはそうなんだけど、これは私にとっては恥なんだよ 自ら恥を晒すって億劫だよ

「雄くん？ 明久はなぜ雄二をそのように呼ぶのじゃ」

うっ 雄二が睨んでくる 前の私なら大丈夫だったけど今の私は怖い

「話すから睨むの止めて ……実は私、女になっちゃったんだ」

「アキが女？ 冗談でしょ？」

「そう思うなら胸触ってみなよ」

「胸？ こんな詰めものなんて……」

ムニ

「あっ……」

「……」

ムニムニ

「ちよっ ダメ」

「……」

「島田、現実を認めろ」

あつ 美波が涙を流してる 何がそんなに悲しいの？ 悲しいのはこつちなのに……

「雄二、まさかホントに明久は」

「ああ 女になった」

「……………（カシヤカシヤカシヤカシヤ）」

「ちよつとムツツリーニ撮らないでよ！」

「吉井君が女の子に……………あはは」

「姫路さん！？ もしもーし？ ダメだ、返事がない」

やっぱりみんな驚いてる そりやそうだよな 友達がいきなり女になつたつて聞いたら普通はそうなるよね

「朝起きた時にはもう女だったんだ 昨日、お風呂に入った時はなんともなかつたのに」

「原因はわからんのじゃな」

「……………（カシヤカシヤカシヤ）」

「だから撮らないでつて」

「何はともあれ原因がわからないままへ夕に何かすると危険だからな 今まで通りの生活をするしかない」

「そんな〜」

それつて一生このままつてこともありえるの？ ヤダよー 男に興味なんてないし、女の子とつき合えないのは嫌だ

……………でもさつきから姫路さんを見ても何も感じない いつもはドキドキするのに もしかして女だから男にしかときめかないつてこと？ 確かに秀吉は別として雄二とか見るとやっぱりイイ体してると思つなー

「まっ今のコイツは別人と考えた方がいいからな ついでに呼び方も変えさせたつてワケだ」

「そうじゃつたか ならワシも変えてもらおうかのう」

「……………俺も」

秀吉にムツツリーニまで？ うーん、雄二は雄くんだからそつち路

線でいくとー

「秀くと康くん、かな？」

「秀くん……か ありがたいのじゃ」

「……………康くんか」

「それなら明久も変えちまうか？」

「ちよつ 何で？」

「気分」

殴りたい コイツを今おもいつき殴りたい でも今の体じゃたいした痛手にはならないし、むしろ私の方が痛いかも あー不便だなあ

「明美<sup>あけみ</sup>なんてのはどうじゃ？」

「……………明音<sup>あきね</sup>」

「明菜<sup>あきな</sup>はどうだ？ 明久、お前が決める」

「……………じゃあ明菜で」

「よしっ決まりだな なら弁当でも食うか」

こうして私の名前は明菜に決まった まあイイ名前だし文句はないけど慣れないといけないなあ

「まあいいや いただきます」

「おつ明菜、美味そうだな 少しくれよ」

「嫌、朝から楽しみにしてたんだから」

「ならほれ、俺のサンドイッチやる だからベーコンの奴くれ」

むむつ 雄二にしては普通に交換してきたな まあ量はあるからいいけど…… からしとか入ってないよね？

「はいっ アスパラのベーコン巻き」

「どれ(ぱくっ) おおっ マジで美味え!」

「雄二のサンドイッチか……(ぱくっ) まんべんなくタレがつけられてる 美味しい」

「なんかワシも食べたいのお」

「……………俺も」

「いいよー」

「ではご相伴にあずかるかの(ぱくっ) この卵焼き、出汁がしっかり効いてて美味しいのお」

「……………美味」

いやー そんなに褒められると照れちゃうよ 朝早く起きて作った  
かいがあつたよ 嬉しいなあ

「明菜、明日みんなの分作ってくれよ」

「えっ? 材料費くれるならいいけど……………」

「なら千円 他に使うなよ」

「ならワシも寄付じゃ」

「……………(すっ)」

みんな千円つつ寄付してくれて手元には三千円ある これなら明日  
は豪華にできるかも なんか血が騒いできた

「よーし 明日は張り切って作るからね 楽しみにしてなよ 頬が  
落ちてもしらないからね!」

こんな感じで昼ご飯をたべながら談笑した そこでは完全に女にな  
って料理を振る舞う私がいて、そのことを気にしない友達がいる、  
とても楽しかった こんな友達がいるなんて嬉しいよ みんなには  
気づかれなかったけど目から涙が一筋だけ流れた

私は明菜（あきな）（後書き）

明菜ですよ

他には思いつかなかったんです



助けて雄くん(前書き)

泣いてください お願いします

どーぞー

## 助けて雄くん

談笑も済んだ後、私たちは試召戦争の話になった

「雄くん、次はどこ狙うの？」

「次はBクラスだ」

「なんでBクラスなんじゃ？」

私たちDクラスなら姫路さんの力でなんとかあったけど、Bクラスだと総合力で負けてるからキツイと思うんだけどな

「正直言うとAクラスにはどうやっても勝てない」

「ならBクラスに目標を変えるの？」

「違う Bクラスに勝ったら設備の交換をせずにAクラスに競争させる、もしくはさせるギリギリまでだ その後なら俺たちは勝てるだろう」

まあAクラスでもBクラスの後にやれば勝てるかもしれない

「それをネタにして一騎打ちをするつもりだ」

「一騎打ち？」

「代表同士のな 細かいことは、その時話す」

何か勝てる秘訣でもあるのかな？ とりあえずAクラスは雄二に任せるとしてー

「それでもBクラスに勝てるとは思えないよ」

「普通ならな だが俺たちは普通じゃない 作戦はこうだ 総力をあげてBクラス教室手前まで戦線を押し込む そこでDクラスにB

クラスの室外機を破壊させる。それで空気が悪くなるから窓を開けさせる。窓から進入してムツツリー二が保険体育でしとめる。」

なんて言うか……大胆な作戦だね。だからDクラスと設備交換をしなかったんだ。布石にはいいんじゃない？

「それならなんとかなるね。流石雄くん、元神童。」

「そこで明菜にはBクラスへの使者になってもらう。」  
「断るよ。」

また私をはめる気？。そう何度も同じ手には乗らないからね。雄二がいけばいいじゃない、代表でしょ？

「そっか。Bクラスには美少女好きがいると聞いたんだが。」

「えっ？。私美少女なの？」

「かなりな。」

「うーん。わかった、行くよ。」

「頼んだぞ。」

べっ別にモテたいからじゃないからね。クラスのために行くだけだし、男探しなんてしないからね……でも今後のために一応

Bクラス

「すみません。Bクラス代表はいますか？」

「あっ？。俺になんの用だ？」

あっ。Bクラス代表は根本君なんだ。卑怯で名高いんだよね。他に

もカンニングは必須、ケンカにはナイフを常備って最悪な人 あま  
り関わりたくないなあ

「Fクラスの吉井です 私たちFクラスはBクラスに試召戦争をし  
かけます 開戦は明日の十時です」

「吉井？ 確か観察処分者だよな つかお前男だろ？ なんで女装  
してんだよ」

「えっ いやっ その……趣味？」

やってしまった 最悪な言い方だよ 変な噂流れる 明日学校来た  
くないよー

「……………バカだなコイツ ん？ 胸に詰めものまでするとは本格  
的だな」

「あっ 触らないで」

「どうせ風船だろ？ おりゃ」

ツン

「(びくっ)」

「なかなか割れねーな」

つんつん

「(びくんっ) ……んああ」

「変な声だすな 気持ち悪い」

つんつんつんつん むに

「(びくびく)んっ ああ ふああ」

「……………」

つつかれるのも意外と感じちゃった　って根本君にバレた!？」

「吉井　おんん「ストップ!」……………」

「そのことみんなにバラさないでくれるかな?　お願い!」

「(にやつ)　へへへ　こりゃいい情報だな　そうだな、戦争中にお前は戦うな　この条件を飲むなら黙っててやるよ」

「そ……………そんな」

「観察処分者はやつかいだからな　いないにこしたことはない」

それはダメだよ　私はFクラスの切り込み隊長だからみんなをまとめなきゃいけないし　他の条件なら飲むからー

「それだけは止めてくれないかな?」

「いや　この条件以外は出さねえ」

「……………わかったよ　でも絶対言わないでね」

どうしよう　私が戦争に参加しないワケにはいかないし……………でも参加したら全校生徒に女になったってバレちゃうし……………　どうしよう　とりあえず戦争はできること雄二に伝えなきゃ

「おっ帰ってきたか」

「明日の十時に開戦って言うてきた……………」

「そうか、ご苦労さん　?　どうした?　ヤケに元気がないが」

「えっ?　別にそんなことないよ」

「浦賀に来たのは?」

「ペリー」

「おかしい　いつもの明菜なら間違えるハズだ　何があった」

えっ あつてたの？ やったーじゃなくて雄二！ あつてたのにおかしいってどういうこと？ 私がいつもバカだつて意味？  
どっちにしる言えないよ 弱みを握られたんだし、雄二にはいらな  
い情報でしょ

「早く言え 後から言われると作戦に響く」

「でも……」

「そんなに信用ないかよ」

「違うよ！ 雄くんは頼りになるよ！ でも……だからこそ邪魔に  
はなりたくないの」

これは私の問題だよ 雄二には関係ない むしろ私だけでなんとか  
しなくちゃダメなの

「ちっ！ おいっムツツリーニ、出てこい」

「……………(すっ)」

「悪いな 盗聴機をお前に仕掛けといてある 話はわかってんだよ」  
「話はわかってるって……ならどうして聞いたの？」

「お前に頼ってほしかったからだよ」

「えっ？」

どういうこと、私に頼ってほしって

「お前は今は女だ 明菜と呼んでるし、別人と考えた方が楽なもの  
事実だ 実はな、俺には明久つてダチがいる 明久は俺の悪友でい  
つもバカみたいなことやってきた仲なんだよ 明久はなんでも自分  
一人で抱え込めると思ったらどんなに辛くても他人には話さない、  
強い意志がある そこには尊敬もできる 男だよ でもお前は今、  
女だろ？ いきがつてんじゃねえよ！ 抱え込んでんじゃねえよ！

お前は弱いんだからもつと頼ってこい！ ……わかったか？」

頭が白くなった 雄二はそんな風に思ってた ずっと ケンカばかりしてたのに 私が抱え込んでるのも見てくれたんだ もしかして裏で助けてくれたりもしたの？ どうしてそんなこと したの？ 雄二にはメリットなんてないじゃん

「ダチ助けるのに理由なんかいらねえし、利益なんて考えて行動してたらバカは終わらせてんだよ」

「……ゴメン」

「そこは謝るところじゃねえ 頼るところだろ」

「うん……（ぐすつ） 雄くん 私を助けて」

「はっ、任せる ムツツリーニ 悪いが作戦変更だ お前の保険体 育で、できるだけBクラスを戦死させてくれ」

「……………（こくり） だが止めは誰が？」

「決まってるんだろ？」

「俺があの下種野郎をぶっ飛ばす！」



助けて雄くん(後書き)

根本くたばれ!!

## 設定

吉井明菜（明久） 通称アキちゃん

21F

学園が始まって初の観察処分者

この話の主人公 なぜか性転換してしまい隠そうとしている 胸はEに近いDカップ 女の体にはまだ慣れてなくて敏感 容姿は7.5巻の表紙のようなアキちゃん ツラじゃないのでリボンやらカチューシャはつけない 女になって姫路たちより男の子にときめくようになった

召喚獣

改造学ランがセーラー服になり、木刀が銃になる 弾は一発に一点消費して五十点消費で銃が増える 威力よりも軽くて扱いやすいものを使用しているため移動しながら撃つこともできる

オリキャラをだすかもなのでまた設定を書きます

この気持ちは……嘘じゃないよ(前書き)

タイトル負けしてないかな？

どーぞー

「この気持ちは……嘘じゃないよ」

根本君に脅された翌日、Bクラス戦の日に

「（カリカリカリカリカリカリカリ）」

雄二は猛勉強をしていた。その目には昨日寝ていないんじゃないか  
つてくらいの隈ができていて、どれほど勝ちたいかが手にとるほど  
にわかる。

「おはよう雄くん」

「ああ」

「今日はBクラス戦。私は参加できないけど頑張ってね」

「ああ」

「……………」

完全に頭から除外されてない？　いくらなんでもやりすぎで倒れち  
やうよ。少し休んだ方が……

「おい明菜」

「なっ何？」

「ちゃんと弁当作ってきたか？　昼まで続いたら一旦休戦にして午  
後から始める予定だ。エネルギーはチャージしときたい」

「一応作ってきたよ。ほうれん草ときのこのバター和え、鳥肉のワ  
イン蒸しがメインかな」

「そうか」

「うん」

「……………（カリカリカリカリ）」

ってそれだけ!? お弁当の心配なんかしてる場合!? 今一番ア  
ンタの体を心配しなきゃならないでしょ!

「雄くん あまりやりすぎると……」

「昨日受けたテストの点数じゃ根本に一对一じゃ勝てねえ だから  
今日受けなおして戦う だから止められない」

「だからって……それじゃ倒れちゃうよ」

私は雄二のことを心配してるんだよ? 倒れたら元も子もないよ  
でもこんな雄二は絶対に止めないし…… 少し手荒だけどしかたな  
いよね?

「えいつ!(がぼつ)」

「なつ明菜! 何すんだよ!」

「膝枕 少しでもいいから寝たら?」

「んなこと聞いてんじゃねえよ! 体の心配なら無用だ! だから  
今すぐ止! 少しくらい心配させてよ! ……」

「雄くんが私のために頑張ってくれてるのは嬉しいよ でも無理す  
るのは駄目だよ アナタだけの体じゃないんだからね」

「……ちっ 五分だけ寝る 時間になつたら起こせ」

そういつて雄二は体を横にして眠った よほど眠たかったのを我慢  
して勉強してくれたんだね、ぐっすりだよ 私のためにこんなにな  
るまで勉強してくれたんだ 嬉しさに涙がこみ上げてくるよ

そんな雄二の頬を優しく撫でる その時に少しだけ唇に触れてしま  
い、あわてて手を離れた なんてだろう? 今すぐくドキドキして  
るのは……

「よしつお前ら Bクラス戦だが殺る気は充分か？」

『『『おー！』』』』

「いい情報だ Bクラス代表は我らがアキちゃんを脅したらしい」

雄二が私のことを名指しする なんか恥ずかしい

「弱みを握って戦争に参加できなくした 許せるか？」

『おのれ根本 よくもアキちゃんを』

『全員で八つ裂きにした後に屋上から紐なしバンジーだ！』

『『『それだ！』』』』

「姫路と島田の数学を軸にムツツリー二の保険体育で敵戦力をそぎ落とす 止めは代表の俺がやる テメエらはその護衛だ、キツチリ死んでこい！」

『『『うおおー！ サッチ・アンド・デス！』』』』

「時間だ 突撃しろ！」

『『『根本覚悟ー！』』』』

ドドドドドッ

Fクラスのみんなが走り去った後の雄二の一言

「単純って扱いやすいな」

コイツはやっぱり代表が向いてるよ とそこで雄二が急に振り返る

ドキッ

えっ？ なに今の？

「どうした？ 顔が赤いぞ？」

かつ顔が赤い！？ どどどどうして！？ 別に雄二のことなんか……

「耳まで真っ赤だぞ 熱でもあんじゃねーか？」

ゆっくりと雄二が近づいてくる 一歩、また一歩と近づいたたびに

ドキッ     ドキッ

ななな何なのこれ！？ なんで雄二が近づいたりするたびにここのよ！

もっもしかして私、雄二にここのこ恋しー

「（ぴとっ）ん？ あんまねえなあ？」

雄二の手が私に触れー

バタンッ

「はっ！？ おいつ 大丈夫か！？」

ダメ……かな？ 意識が朦朧としてきた 頭がグラングランして気持ち悪い 気分は最悪だよ

でも雄二に抱きかかえられて幸せなのはやっぱり……恋なんだね

「……ねえ雄くん」

「ほっ 待ってる、今保険の先生呼んで来てやる」

「待つて…… 言いたいことがあるんだ」

「何だ？ なんでも言ってみる」

「あのね 私、雄くんのがー」

「ー好きになったかも」



この気持ちは……嘘じゃないよ（後書き）

今後の展開にご注目

待ってるよ……（前書き）

この話、書きやすいのは何故？

どーぞどー

待ってるよ……

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ 俺たちはFクラス全員で総攻撃をしかけBクラス前まで戦線を押し込んだ 代わりに大幅に戦力を削られたがドアは二つしかないから消耗は少なくてすみ適度に交代 補充試験を繰り返せばBクラスも倒せるだろう

「姫路と島田で右の入り口で数学勝負 ギリギリまで戦ってヤバくなったら交代！」

「はい！/まかせて！」

「左は秀吉を軸に複数対一で戦え！」

『『おっつ！』』

よしっこれで準備はできた あとはムツツリー二の順番だ 頼むぜ

「誰かDクラスにBクラスの室外機を壊す指示をだせ」

『俺がいく』

室外機が壊れれば根本の野郎は混戦して空気の流れが悪いから窓を開けるハズ そこが今回のキーだ  
時間だ 頼むぞムツツリー二

『くそ暑いなあ 空調止まってんのか？ 誰か窓を開ける』

きた！

ガラガラ

窓を開ける音が聞こえる

ここで教師の特徴について教える 教師は自分が担当する教科のフィールドを展開することができ、その広さは十メートルくらいだ（高橋学年主任は全教科）

教師にはそれぞれ特徴があり、例えば数学教師は採点が厳しいが速いため、短期決戦に向いている 世界史の教師は採点が遅いが甘く、少しのミスはたいがい丸になる つまり長期決戦向きだ それでは体育教師は？

むろん、その体を活かした行動力の高さにある！

ダツダダンツ

『なっ！ 窓からだと！』

「Fクラス土屋康太 Bクラス近衛部隊全員に保険体育で勝負を仕掛ける サモン！」

『なっ何だと！ くっ サモン！』

「待ってたぜ、ムツツリーニ！」

ここで余談だが今Bクラスの左にいる古典の教師にも特徴はある  
それは――

「先生、ツラがずれてますよ（ぼそっ）」

「なっ！ 急用を思い出したので失礼します！」

これで左側の入り口は開けた さーて最後の戦いだぜ

Bクラスへ入り代表である根本を睨む くだらねえことしやがって、お仕置きだぜ

「よお根本 代表が直々に倒しにきてやったぜ？ 感謝しな」

「倒すだと？ Fクラスのクズが勝てると思ってんのかよ！」  
「どうだかな ちょうどムツツリーニも終わったみたいだし保険体  
育で勝負しようぜ」

Fクラス 土屋康太

保険体育 167点

Bクラス 近衛部隊×10

保険体育 0点

「……………流石にこれ以上は無理だ 後は頼む（グツ！）」

「ああ任せろ いくぜ根本！ Fクラス代表、坂本雄二がBクラス  
代表、根本恭二に保険体育勝負を申し込む！ サモン！」

「返り討ちだ！ サモン！」

Fクラス 坂本雄二

保険体育 325点

Bクラス 根本恭二

保険体育 203点

「坂本…………お前…………」

「元神童をなめたのが敗因だ じゃあな」

ドスッ

俺の召喚獣が大きく振りかぶり根本の召喚獣の顔面へ拳を叩き込む  
召喚獣は吹っ飛んでいき倒れた後、ポンツと音をたてて消えた

「Fクラス対Bクラス Fクラスの勝利！」

『『『うおおおおおおお！！』』』

あー 終わった終わった 疲れたぜまったく まっこれで少しは仇討ちにはなったかな？ さて戦後対談だ お前に面白いものを見せてやるよ、明菜

side 明菜

私は今、保険室のベッドで休んでいる 雄二があの後運んでくれたんだ だからまだ少しだけ温もりが残ってる

「……………えへへ／／／／／」

私は思い出してニヤけていた

「私、雄くんのが好きになっただかも」

「……………」

「今は女だけど……………前の私がこんなこと言うのはおかしいと思う

けど、雄くんを見ると胸がドキドキして止まらないの」

「……………」

「雄くん、好きです 私とつつ付き合ってくれないかな?」

こっ告白しちゃった どうしようフラれちゃったら 生きてけないよ……………」

「……………はぁ ……少し待ってる」

「えっ?」

「Aクラス戦が終わるまで待ってる そこでケジメをつけてくる」

どういうこと? ケジメって何?

「ケジメつけたら……………お前と付き合ってやる だからそれまで待ってる」

「えっ そっそれってー」

「それだけ話せりゃ結構元気だな なら一人で保険室にいけ 俺は戦況を見てくる」

「あっ待って……………行っちゃった」

あの時ケジメをつけたら付き合ってくれるって言ってたけど……………」

「それって私のこと……………好きってことだよな?」

好きでもない女の子と付き合うなんてしないもんね 私たちは両想いってことだよな

えへへへ／／／／／

「待ってるからね、雄くん」



待ってるよ……（後書き）

雄二が運んでくれたのに雄二は明菜をおいていった？

つまり間違いです！

すいません

……嘘つき(前書き)

眠いけど話の続きが出てきて書いたのがこれ

どーぞー

……嘘つき

ガラッ

保険室に雄二と秀吉とムツツリー二と……俯いてて誰かはわからないけど女の子が入ってきた 戦争は……勝ったみたいだね その笑った顔、間違いないよ

「おいっ明菜 面白いものを見せてやるよ」

「面白いもの？」

「ああ ほらっ顔をあげろ」

俯いていた女の子が顔をあげる

「って根本君！？ どうしたのその格好!？」

「どうやら女装に目覚めたらしくてな さっきまで撮影会をしていた」

「そうなんだ……プッ クスクス……アハハハハ たっ確かに面白いよ アハハハ」

「ついでに謝らせる なっ根本ちゃん？」

「……脅したりしてごめんなさい」

「ねっ根本ちゃんって アハハハ やっ止めて、お腹が痛い」

「よしっ 後はAクラスに戦争の準備ができてるって宣言してこい もちろんそのままだな」

「……わかりました」

「またね根本ちゃん」

「秀吉とムツツリー二は監視してくれ」

「了解じゃ」

「……まかせろ」

根本ちゃんたちが保険室から出ていった　つまり今は雄二と二人つきり

……ってええ！？　どうしよう、恥ずかしいよ　何か話さないとなつ　何かないかな、話題がないかな（キョロキョロ）

「おいっ」

「ひゃい！」

「？　何をそんなに驚いてるんだ？」

「べつ別に驚いてなんか……　それより何か用？」

「まあいい　ただお前に伝えたかっただけだ」

「伝えたいこと？」

えー　そんな伝えることなんてあるかな？　ないと思うけど

「あの時の俺の言葉に嘘はない」

「あの時……」

あの時っていつ？　さっきの根本ちゃんのこと？　まっまさかホントに女装に目覚めたの！？　それは一大事だね！　応援しなきゃ！

「言っておくが根本のことじゃないからな」

「えっ違うの？」

「ったく　あの時つてのはFクラスでのことだ　あの時、ケジメをつけたらお前と付き合っつて言っつたら」

「うん、まあ」

「お前のことだから嘘だと思って混乱しそつだからな　あの言葉には嘘はない　絶対だ」

私のこと心配してくれたんだ　確かにいつもの私だったら嘘か本当

かわからなくなつて混乱してたかもしれない　でも大丈夫だよ

「心配してくれてありがとう　でも私は雄くんのこと信じてるから大丈夫だよ（にこっ）」

「そつそつか／＼／＼　ならいい」

「？　顔赤いよ？」

「なんでもねえ！　それよりもう帰る時間だぞ」

えっ嘘！？　もうそんなに時間経つてたの？　うーん、やっぱり好きな人のこと考えて過ごす時間って短く感じるなあ

「あつそういえば私お昼食べてない」

「ん？　ああ悪い　秀吉とムツツリー二とで全部食べてしまった美味かつたぞ」

「えーひどい　せつかく『あーん』とかしようと思つたのに」「恥ずかしいから止めてくれ！」

なんでよ、別にいいじゃん　まあそれは次の機会ってことで

「じゃあカバンとつてこよ」

「それくらい俺がとつてきてやる」

「いいの？」

「お前より俺の方が足は速い　ちよつと待ってる」

そついつて雄二は走つて教室へ行った　こつという地味な優しさがまたいいんだよねー

ガラッ

えっもう戻ってきた？　まだ一分も経つてないよつて違った　女の

子だ えーと確かAクラス代表の霧島さんだね どうしたのかな？

「……アナタが雄二についてる悪い虫ね」

「えっ？」

悪い虫ついていきなり何？ 私何もしてないし、いくらなんでも失礼だよ でも雄二のこと呼び捨てにしてるし、どんな関係なの？

「……最近雄二と一緒にいてくれない」

「そんなの知らないよ」

「……アナタのせい アナタが雄二の側にいるから」

「関係ないじゃん、私が雄くと一緒にいても」

「……関係ある 私は雄二の恋人」

「うっ嘘っ！」

そんなの嘘だよ！ だってさっき私と付き合ってくれてるって約束してくれたんだよ？

「……嘘じゃない」

「嘘っ 嘘嘘嘘嘘嘘嘘」

「……これ以上雄二に近づかないで」

そう言い残して霧島さんは出ていった 嘘だよね？ 雄二に恋人がいるって？ でも霧島さんの方が美人で頭もいいし、私が勝ってる所なんてない ということ？ 私の気持ちを笑ってたの？ ちゃんと本命の人がいて私とは遊びで付き合うつもりだったの？ 期待させるとして裏切るの？ 信じた私がバカだっというの？

ポタッ

嘘……ついてたの？

ガラッ

「悪い、遅くなったん？ 何泣いてんだ？」

「……………」

「黙ってちゃわかんねえだろ ほらっ話せ」

「……………つき」

「あっ？」

「（キッ！） 雄くんの嘘つき！」

「はっ？ ちよっまてっおい！」

私はカバンをとって走り去った。なんで嘘なんかついたのよ。雄くんの嘘つき。

「どづしたんだアイツ……」

嘘つきって何があったんだ？」



……嘘つき（後書き）

雄二ー！？ それとも霧島の畏！？

どっちは次回わかります

……ありがとう

雄二に嘘をつかれた 最低な嘘だった 恋人がいるのに私と付き合い  
つてくれるって…… 言われた時はすごく嬉しかった、好きな人に  
そんなことを言われるなんて思いもしなかった 期待して待ってい  
ようって思った それなのに雄二は嘘をついていた 想いが大きか  
った分、それだけ辛かったし悲しかった だから誰もいない家で一  
人で泣いている

「うえーん……ぐすつ……ひくつ……ううう」

雄二の嘘つき！ 大っ嫌い！ もう二度と会いたくなんかないよ

そんな風に考えていた時だった

ピンポン

こんな時に誰？ 今誰とも会いたくないの、一人にして

『おいつ 明菜 開ける！』

「！ 雄くん!？」

何で？ 何で私の家に来たの？ 反射的に玄関まで行ってカギを開  
ける 会いたくないとまで思ってたのに雄二が来たことに心のどこ  
かで嬉しく思っている自分がいた

「（ガチャ） 明菜、上がらせてもらっぞ」

「ど、どござ」

奥に案内してイスに座らせる その向かいに私が座ったところで雄二が切り出した

「何で泣いてたんだ？」

「雄くんに嘘つかれてたから」

「嘘は言った覚えはねえぞ 何かの間違いじゃねえのか？」

嘘は言った覚えがない？ ふざけないでよ！

「じゃあ何で霧島さんと付き合ってるのに私と付き合うなんて言ったのよ！」

「はっ？ 何で翔子がそこで出てくんだよ」

「霧島さん言ってた 私は雄二の恋人だって だから私は邪魔だって、雄二についてる悪い虫だって言われた 確かに霧島さんからすれば私は虫みたいなものかもしれない でも雄くんに付き合ってくれるって言われたときは嬉しかった 期待しずっと待ってるって決めてた どうしてなの？ 何で恋人がいるのに付き合ってくれなんて言ったの？ 喜んでる私を見てバカにしたの？ 答えてよ」

「……………」  
「やっぱり、答えられないんだ 凶星だったんだ 最低だよ 何で…………… 何で騙したの……………」

また涙が出てきた 嘘つかれてたんだ 心のどこかで否定している自分がいて、大丈夫だって言い聞かせてたのに…………… 無駄だったね

「…………… もう帰ってくれない 今は顔見たくないんだ」

「…………… 知るかなこと 俺はここにいます」

「何だよ 私を騙してたくせに」

「……はあ、ムカつくわ いい加減にしろよ バカにしてんのか？」  
「バカになんかしてないでしょ 早く帰ってよ それとも何？ な  
ぐさめてでもくれるの？」

「誰がするか、自業自得だろ 何で俺が言ってもないのに他人の言  
うこと信じてんだ！ バカか！」

「えっ？」

「翔子と俺は付き合ってたんじゃない 確かにアイツは俺のことを好  
きでいてくれるがそんなの関係あるか！ 絶対嘘は言っていないっ  
て念を押しましたのに……そんなに俺を信じてねえのかよ！」

雄二と霧島さんが付き合ってたない？ そっそれじゃあー

「霧島さんが嘘ついてたってこと？」

「ああ アイツ、俺の近くにいる女にはそう言って近づかせないよ  
うにしてんだよ 迷惑だ」

「でも霧島さん、美人だし頭も良いし 私より全然いい女だよ？」

「つまらない」

「私なんて元男だよ？」

「しかも友達だった そいつが女になって美少女なら普通はそっち  
選ぶぞ」

「でもっでもー」

「ホントに信じてねえな…… ちっ ちよつと面かせ」

「えっ何ですよ？」

「いいからかせ」

「あっちよつと待っくん!？」

ちゅっ

「……わかったか？ 俺はお前が好きだから付き合っただから  
黙って俺を信じとけ」

「……………うん／＼／＼／」

キス……………されちゃった どうしよう、すっごく下キ下キしてる 苦しいかも でももう一回ー

「……………ねえ雄くん」

「なんだよ」

「もう一回だけ……………キス、してくれないかな？」

「はあ!？」

「ね、もう一回だけ お願い」

目を閉じる ホントにもう一回だけでいいから

「……………最後だからな」

「うん んんっ」

二回目のキスはさっきより強くて優しいキスだった

「……ありがとう」  
「ふんっ」

……ありがとう(後書き)

感想待ってます

同士か(前書き)

短っ！

それだけです



## 同士か

私こと吉井明菜は休日を楽しんでおります Aクラス戦を前に少し休憩したいと雄二に言ったら一日だけ、休みをくれました つまり学校サボってます こういうのって何かドキドキするね  
そしてゲーム屋へ向かう 今日発売のものを買ったためだよ いつもは学校帰りとかにしか寄れなかったから、開店同時に入れるのは嬉しい 今日ゲームで一日満喫しようと

ゾクッ

「っ!」

何?今の感覚…… 刺すような痛みと哀れむような視線 それが混ざった感覚が一気に私の身体に広がり、一瞬で消えた  
気のせいかな……? 辺りを見回して同じ感覚はないか探す ……  
うん、ないね 気のせいだったみたい

「早く帰ろっ」

いそいそと家への道筋をたどる さっきの感覚は二度とこなかった  
でも、さっきの感覚に未知の近さを感じたのは……

んーん、なんでもない 気のせいだよ

「吉井明菜……か　よりによって同士かよ　こりゃ案外楽しめそうだな」

さっきまで明菜がいた場所に現れた一人の男　その手は血で真っ赤に染まっている

その脇には数人のヤンキーが倒れている

「俺の獲物に手をだそうとしたのが悪いんだぜ？　後悔と反省はあの世でしな」

男は笑いながら明菜にナンパしようとしていたヤンキーを見下す  
その目は燃える様な赤色をしている　ただその目には光がなく陰ができていて濁りきっていた

「Aクラス対Fクラス戦 楽しみに待ってるからな」

同士か（後書き）

Aクラス戦おつたのしみに

現実（リアル）は今から始まる（前書き）

神光臨？

どーぞー

## 現実（リアル）は今から始まる

「まずは皆に礼を言いたい 周りからは不可能だと言われてたがとうとうここまでできた これは皆のおかげだ 感謝している」

雄二がガラにもなく素直に礼を言った でもあれは本当にそう思っているからだね Fクラスが今、Aクラスを墮とそうとしているのはFクラスの皆のおかげ

「Aクラスだが俺は一騎打ちで勝つつもりだ やるのは俺とAクラス代表の翔子」

でも勝たなければ意味がない 設備を交換せずに来たから相変わらず悪いままだよ 雄二は何か秘策があるらしいけど……ホントに大丈夫？

「アイツには昔イタツラで嘘を教えた アイツは一度覚えたことを忘れない それを逆手にとる」

言われれば卑怯な作戦だけど霧島さんに遠慮はいらない 私と雄二を遠ざけようとした罪は重いんだから

「俺は絶対に勝つ そうしたら俺たちの机はー」

『『『システムデスクだ！』』』

「一騎打ち？」

「ああ 俺たちFクラスはAクラスに対して代表同士の一騎打ちを申し込む」

恒例の戦線布告 Aクラスには雄二、秀吉、ムッツリーニ、姫路さん、美波、私と大勢できている 一人だと萎縮するから皆ときたそれでも格上の相手を前に緊張はするよ

ゾクッ

「っー」

いつ今のはゲーム買いに行ってたときに感じたのと同じー 一体どこから？ まわりを見てもAクラス生は全員こつちを見ているからわからないや

「姫路を警戒してるのか」

「代表なら大丈夫だと思うけど万が一ってこともあるしね」

いつの間にか交渉は進んでいたけど断られそう 作戦が使えないと私たちは勝てないよ 大丈夫かな？ 雄二に任せるしかないけど心配だなあ……

「面白いじゃねえか 受けてやるよ、その条件」

「「！！」」

いきなり交渉の場に現れた一人の男 誰もが気づかないうちに、それも一瞬でここまで来た なんなのこの人…… 目は燃えるよう赤なのにハイライトが消えていて濁っている それ以外に特徴はない 強いて言うなら――

「私とにている……」

根拠はないけど彼は私とにいて、でも私と大きく違う この解けない矛盾は何？

「ちよつと黒野沢君、勝手に何言ってるのよ 代表の許可無しに決めることはできないでしょ！」

「黙れ木下優子 その代表様が受けると言ってやってんだ テメエは散れ」

えっ？ この人、今何て――

「俺は黒野沢直人 Aクラス代表だ」

side直人

「何っ！？ Aクラスの代表は翔子じゃないのか！？」

目の前で赤毛ゴリラがわめいてる うるせえな、黙ってるよ



「霧島は代表だよ 仮のな」

「どういうことだ?」

「俺の単科目は全て500点を越える 霧島なんて相手じゃねえただそれだと誰も勝てねえだろ? だから今までは霧島に代表をさせてた けどFクラスみたいな底辺がAクラスまでたどり着いたんだ なら俺がでて変わらんだろ」

「500点越えだ?!? そんな奴がいたのか!?!」

ああ、人が慌て驚き悩む姿は見ていて飽きねえな もっと悶えろ、苦しめ、狂え そしてあっけなく死ぬよ 墓くらいは用意してやるぜ?

「でさっきの話だが……俺は受けてもいいぜ? 予定が狂ったなら止めてもいいが」

「くっ!」

「実力差もわからないワケじゃないだろ? 止めとけよ……:といたいところだが、Fクラスがここまで来たんだ 褒美として素晴らしい条件で戦ってやる」

「褒美……:だと?」

「俺対Fクラス、それでいいぜ」

「……何が目的だ」

ふーん 元神童と言われたことはあるわけか、疑ってやがる 元のくせに氣にくわねえな まあ普通の奴なら気づくだろうから実力はまだ保留か?

「勝つたら一つ言うことを聞く、しかもFクラスは一人に一つずつだ 破格の交渉だぜ? その代わりー」

破格の交渉、それは相手を誘うには必要なものであり、絶対に勝た

なければならぬものだ だからこそ勝ったときに得るものは計り  
知れないほど大きい 俺の目的、それは――

「吉井明菜 お前、俺の女になれ」

「えっ？」

「Fクラス代表様よお …… やらないのか？」

「お前ホントに一人で勝てると思ってんのかよ なめてんのか！」

あははは、ゴリラが怒ってやがる なめてるかって？ ああなめて  
るよ お前らが束になってきても絶対に負けることはない

「俺と会った瞬間からお前らの人生はフィクションからリアルに変わった そ  
の現実の中の神は俺だ せいぜい崇め尊び崇拜し従い尽くせ そし  
て……消える」

ドンッ

「ガッ……！」

触れずにゴリラを教室の外へ吹き飛ばす

「神の力に逆らうなよ？ 戦争開始は明日の十時 楽しみだぜ」

「ま……… て 何で明菜を………」

「異色は異色同士、交じりあうもんだ 最後に言っとくぜー」

「現実は今から始まった 絶望に染まれ、それが一番楽な生き方だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2614ba/>

---

私（僕）と性転換と召喚獣

2012年1月14日02時52分発行